

人類学の未来

中沢 新一

なかざわ しんいち / 1950年山梨市生まれ。多摩美術大学芸術人類学研究所長、同大学芸術学科教授。おもな著作に『チベットのもつアルト』『森のパロック』『カイエ・ソバージュ(全5巻)』『精霊の王』『アースダイバー』(講談社)『芸術人類学』(みすず書房)『ミクロコスモスI』『ミクロコスモスII』(四季社)などがあ

Anthropologie という言葉には、二種類の日本

語訳がある。ひとつは言うまでもない「人類学」で、二〇世紀にその学問が大いに隆盛をきわめたころには、そのなかにさらに文化人類学や社会人類学や経済人類学のようなたくさん太い枝がわかれ、研究は豊かに繁茂した。

しかし二〇世紀も後半を過ぎると、経済のグローバル化や通信交通の発達によって、いわゆる「未開社会の研究」を根幹にすえる、マリノフスキー以来のこの学問の屋台骨は、しだいに内側から突き崩されてきた。そのため今日では、「人類学批判」を掲げる新しいタイプの学問のほうに、若い研究者の関心は集まっている。よつするに、「人類学」と翻訳された Anthropologie は、今あまり元気がないのである。

しかし、もうひとつの Anthropologie があることを忘れてはならない。「人間学」と訳されてきたその学問は、一八世紀に哲学者カントがケーンヒスブルク大学の講義題目として案出したもので、現代の「人類学者」たちは今日まで、それにほとんど注目してこなかった。カントは「人間学」の講義において、人類の心とは何か、という普遍的な問いかけから出発して、文化の多様性や人間心理の不思議を解明する、その当時にはまだ未知の学問だった Anthropologie

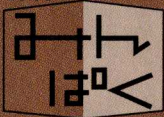
を構想したのであった。

この学問の根幹は、ホモ・サピエンスであるわたしたち人類の心の構造とその認知の能力にすえられている。人類の心は、超越的なものが「ある」ということは直感することができるが、認知能力に限界があつて、それを認識することはできないようにできている。ここから、神話思考や宗教にかかわるすべての人間的現象が発生する。社会のつくられかたや、自分が知覚した環境世界の事物を分類して、そこから世界観の図式を生み出してくるのも、この認知の能力をもつた心なのである。

したがってこの「人間学」では、「遅れた社会」の研究だけが優先されることはない。フィールドワークはいかかわらず重要だけれど、旅や探検が今までどおり意味をもつわけではない。その証拠に、宇宙空間にまで進出した人間は、自分が何者であるかを知らないままだ。「人間学」である Anthropologie は、その人類の心という、いまだに未知の大陸の探究をめざすのである。

この「人間学」は、いま危機がささやかれている「人類学」よりも、大きな学問である。わたしは今までの「人類学」を、カントの構想したような「人間学」に脱皮させていくことによって、この学問を真に二一世紀の学問として生まれ変わらせたい、と望んでいる。

月刊



目次

NOVEMBER 2007 11
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
人類学の未来
中沢 新一

02 特集
開館30周年記念特別対談
国際協力に民族学の
知識と経験を
緒方 貞子・松園 万亀雄

10 地球ミュージアム紀行
トン族観光のおすすめ博物館
兼重 勇

11 表紙モノ語り
オセアニアの柳
小林 繁樹

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
けがれ、衛生管理、あるいは癒し
森 明子

15 時論・新論・理想論
東南アジア「15年サイクル説」
田村 克己

16 外国人として生きる
あるソニンケ商人の人生
—アフリカからアジアへ—
三島 禎子

18 2007年春 特別展
「聖地★巡礼
—自分探しの旅へ—」
をふりかえって
大森 康宏

20 生きもの博物館
観光資源としての植物
落合 雪野

22 フィールドで考える
タイの漁民と頭家
小河 久志

24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記